



「お天気科学」

—気象災害から身を守るために—

小倉義光 著

森北出版株式会社 1994年9月

A 5版 226頁 2575円

田舎とはいえ、気象学講座の看板を掲げていると、昼夜の別なく、新聞テレビの地方局からお天気について電話の問い合わせがくる。先日も、大阪の池田市に大雨が降ったとき、早速某紙社会部から「この豪雨の原因は何ですか」との質問があった。どうやらその記者は、何か特別のことが発生したと思っているらしい。折悪しく(?)ビールを飲みながらテレビのナイターを観ていた最中だったので、こう答えた。「雨というものは降るものです。雲の動きから見て前日は日本海の上で大雨だったはずですよ。あなたは海上の豪雨を記事にしましたか?」一瞬鼻白んだ相手は、「集中豪雨のメカニズムは気象学的に——」と言い直した。「そんなことは5分やそこの電話で簡単に説明は出来ません。然るべき本を通読して下さい」と答えると相手はお邪魔しましたと詫言いで電話を切った。巨人が負けていたときとはいえ、いささか大人げのない対応だったと反省している。

しかしながら、この大雨に対する新聞記者氏の関心のありようは、まさに日常の「お天気」に対する一般市民のかかわり方を代表しているものであろう。自然現象に対する「なぜ?」という素朴な問いかけと裏腹に自分の頭の上のことにしか関心を持たない姿勢にひそむ二面性である。考えてみれば、古来これは、気象学の根源であるアリストテレスの概念的な自然認識と農民漁民の知恵としての天気俚言、の両極端に象徴されている宿命でもあった。問題はしたがって、現在の我々が、如何にしてこの二面性を調和させ得るか、にある。繰り返して言うが、これは至難の業である。生半可なことでは済まされまい。

さて、ここに紹介する小倉教授の新著は、この難問に正面から挑んだ意欲作である。いみじくも、表題には「科学」、副題には「気象災害」とうたっている。導入部でいきなり長崎の豪雨と千葉の竜巻きによる災害の実例を生々しく示した後、一転して気圧(とその変化)の話ニュートンやパスカルの時代に遡って初等

物理の言葉で丁寧に説明する。このスタイルは以下の各章でも一貫して用いられている。即ち、ジェット気流、温帯低気圧、冬の季節風と北陸豪雪、夏の雷雲、集中豪雨、マイクロバースト、竜巻、フェーン、台風、等々の一般の人にも馴染み深い話題が、その原理と災害の両面から語られている。まえがきで著者は「各章の始めは記述的・物語り調、終わりのほうが説明的」、「理解しにくい箇所は飛ばして次章に移って構わない」と述べているが、違和感は全く無い。実にスムーズについていける。とにかく面白く読めること請け合いである。さきほどの記者氏が本書を読めば、大気が「不安定」で大雨が降った云々、の意味を正しく理解出来るはずである。

この読み易さは何に由来するのか。思うにそれは、流麗かつ明晰な文体や適切な図表の配置に加えて、気象学用語はゴシック体で書きその前後に平易な解説を添えるなどの親切な気配りにもあろう。記述と理屈の融合は「遠近法」の技の冴えと言って良い。要するにこれは、「本当にわかっている人」のみが為し得る業である。本書は26年前の名著「大気科学」(NHKブックス、1968)の延長線にあるとも言えるが、旧著の背景にあったGARP(地球大気開発計画)時代の、当時40代の著者の「力み」は昇華されて、今や「大家の風格」を漂わせている。

本書はまず、気象に関心を持つ一般社会人にひろく読んで貰いたい。学校の理科で気象を教えている教師には、生徒の興味を引き付けるための格好の虎の巻になる。気象の仕事に携わっている人々には、既成知識の整理以上に新鮮な発見があろう(私自身がそうであったように)。そして、これから本格的に気象の勉強を始めようとする若い学生にとっては、またとない「総観気象学入門」となる。

この書評は、定跡を無視し、瑕疵を探すことは敢えてしない。一読して難点を発見する読者がもしいたら、それはすでに立派な気象の理解者である。むしろ私は、小倉教授に次のことを期待したい。この豊かな経験と若々しい精神で、いま気象界に一番欠けている新しく本格的な「総観気象学」のテキストを是非とも書いていただきたい。いまそれが出来るのは、小倉先生、あなたしかいない!

(京都大学理学部 廣田 勇)